



神戸大学附属図書館 震災文庫とデジタルアーカイブズ : その特色と今後の課題

中山, 貴弘

(Citation)

専門図書館, 232:74-78

(Issue Date)

2008-11

(Resource Type)

article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90000687>



第5分科会：アーカイブズの現状と今後

2. 神戸大学附属図書館 震災文庫とデジタルアーカイブ：その特色と今後の課題

中山 貴弘（神戸大学附属図書館 電子図書館係）

1. 記録と記憶

2004年11月、神戸大学附属図書館は第1回展示会「資料でたどる阪神・淡路大震災の記録と記憶」を開催し、887名の来場者（うち、学外から約600名）を得た。会場は図書館の展示会としては異例ともいえる熱気をおび、来場者からは震災記録への関心の高さがひしひしと感じられた。展示会タイトルの通り、記録を通して震災の記憶があらためて鮮明にされることを体験していただける機会となった。

阪神・淡路大震災という未曾有の災害において、人々はその体験を記録という形で残すことを選んだ。またこの災害の中で生産された様々なモノを捨ててしまうことなく、震災の記録として保存しておいた。後世の人々は、こうして残された記録に触れることによって、自分の記憶を新たにし、あるいは記録に残された体験を疑似体験することになる。

「震災資料」の計画的な保存はボランティアグループからはじまったようである。それは、雲仙・普賢岳噴火での救援活動の記録が残されておらず、その経験が阪神での活動に生かされていないとの認識から行われたものであったという（佐々木2006, p.23）。このように、記録の保存を通して知識を未来に伝えていこうとすることは、そもそも図書館活動の原点であったといえないだろうか。

神戸大学附属図書館の震災文庫は、そうした図書館活動の根本に立ち返り、図書館員自身の発想で文庫を構築した貴重な例であると筆者は考えている。

2. 震災文庫の歴史

2.1 震災文庫設立の目的

阪神・淡路大震災に関連する資料を網羅的に収



集し、その保存・公開を通じて研究、防災・復興計画へ寄与することが震災文庫設立の目的である。

震災文庫の公開当初、次のような文章が発表されている。

“神戸大学附属図書館では、被災地の中にある図書館の責務として、本日より「震災文庫」を公開することにいたしました。

災害復興や地震研究・防災対策などに役立てていただけるよう、震災にかかわるあらゆる資料を可能な限り収集し、被災地をはじめ全国の皆様に、広く提供いたします。”（「震災文庫を利用される皆様へ」1995.10. 附属図書館ホームページに掲載。傍線筆者）

ここで述べられているように、資料を収集・保存・公開することは被災地にある大学図書館としての責務であるとの認識がまずあって、震災文庫はスタートを切った。

2.2 震災文庫年代記

1995.4 収集活動開始。収集・公開などの取り決め文書「『阪神・淡路大震災に関する文献・資料』の収集及び提供について」を作成（1995.6.6）。

震災資料の収集はまず図書の収集から試みられ

たのであるが、それだけでは不十分であることがすぐに判明する。そのため、4月頃から内容の策定をはじめていたこの文書では、「関係資料を網羅的に収集」することがうたわれている。

この「網羅的」という概念が後々まで震災文庫の運営に大きな影響を与えることになった。すなわち、従来の図書館資料の範囲を超える資料を対象とするため、収集方法から整理方法、そして目録データ（メタデータ）の作成まで、「網羅的」に収集された資料群をいかに扱うかということ、試行錯誤を交えつつ実践する必要があったのである。

1995.7 収書速報を冊子および図書館ホームページで公開。

震災文庫のユニークな点のひとつに、収書段階でその情報を公開してきたことがあげられるだろう。また、ちょうどインターネットの利用が普及しはじめた時期でもあり、当初からそれを活用したことも特徴的である。ホームページで収書速報を見た人からの資料提供も稀ではなかったようだ。

1995.10 震災文庫公開開始。震災文庫ホームページの独立。

スタート時点では震災文庫も量的にはまだまだ小さな事業であり、雑誌閲覧室の一角で1,034点の資料を公開開始した。2年後には公開件数が1万件を超える。

1998.9 チラシ等1枚ものの資料の電子化のため著作権処理作業を開始。

1996年に「電子図書館」構想がもちあがった時、神戸大学独自のコンテンツとして震災資料がまず候補にあがったのは当然のことであった。そして1999年の電子図書館運用開始にむけて、その前年から著作権処理作業が開始された（著作権処理については4.2で後述）。

1999.4 電子情報掛（現電子図書館係）設置、電

子図書館システムの運用開始（7月）に伴いデータベースを構築し、電子化資料を公開。

収集した震災資料の簡単な検索つき目録は既に公開されていたが、電子図書館の開設を期に、それは大量のメタデータを扱うデータベースとして、詳細な検索機能を持つに至った。

2004.10 震災文庫として社会科学系フロンティア館に168m²の独立スペースを持つ。

収集点数が約38,000点となった震災文庫はついに独立したスペースを持つことになった。このお披露目式ともいえるものが、冒頭に述べた展示会であった。

3. 震災文庫の資料

3.1 収集資料内容

既に繰り返し述べたように、震災文庫の所蔵資料は「網羅的」に収集されたものであり、著しい多様性を持つことが特徴である。

発行形態から見ると、商業出版物、自費出版物、非売資料と分類されるが、中でも非売資料は、ボランティア関係資料や行政資料のような、意欲的な収集活動なしには保存されなかったであろうものを大量に含んでいる。

資料形態から見ると、図書、雑誌、新聞、パンフレット、一枚もの（ポスター、ちらし）、AV（ビデオや音楽CD）、電子資料など、震災に関するほぼありとあらゆる形態の資料を収集している。

図書のような通常の図書館資料とは違う形態のものも多いので、次に紹介してみたい。

「被災度別建物分布状況図（震災-1-201）」。本工学部会の学会が主に大学周辺地区における個々の建物の被災度について、地図に色分けして記入したものである。これは手書きのオリジナル資料であり、また大型の地図であるため、特別な保存方法をとっている（3.3でも述べる）。

本学農学部避難所では、学生ボランティアが毎日の給食を写真に撮っていた。この貴重な記録は「避難所支給給食弁当写真集（震災-6-v688）」

として、写真現物のアルバムが震災文庫に、また電子化した画像がデジタルアーカイブに収められている。

鉄道が寸断された中で運行された代替バスや振替輸送に関する通知、不通区間の案内など、各駅に掲示されたポスターが震災文庫には多数収められている（震災-13-s190ほか）。

またプロやアマチュアのカメラマンによって撮影された写真やビデオ映像、さらには地震直後の列車内アナウンスを記録した音声ファイル（震災-13-5ほか）が収められており、震災文庫ホームページ内「デジタルギャラリー」でも公開されている。

なお震災文庫の扱う資料は従来の図書館資料の範囲を超えているが、あくまで図書館としての立場で収集が行われている。すなわち、公開できる資料のみを扱い、整理は主題別分類という図書館的手法によって行われている。この点において、例えば「21世紀ひょうご創造協会」による資料収集が「出所原則」「原秩序尊重の原則」にのっとったアーカイブズの発想で行われていることとは対照的である（佐々木2006, p.28参照）。

3.2 資料収集方法

前項で紹介したような、通常の図書館資料の枠に収まりきらない資料を収集していることが、震災文庫の最大の特徴である。

そのため、収集には通常の出版社カタログを見るだけでは足りない。日常の収集活動において、新聞は重要な情報源である。新聞記事そのものが収集対象ともなるし、記事内に例えば自費出版の資料が紹介されていることもある。さらには新聞の広告欄で週刊誌などの内容を知ることもしできる。新聞を読んで関連記事・資料を探すことは現在に至るまで担当者の日課となっている。

また行政関係やボランティア団体などとの人的ネットワークが収集には大いに役立った。さらに、収集した資料の記述から関連資料を見つけたり、寄贈者から追加資料が寄贈されることもあり、考え得る限りの様々なルートから網羅的収集に努め

ている。

3.3 整理・分類方法

このような多様性を持った資料をどう扱うか。公開と保存を両立させるにはどうすればよいか。

この問題に対処するため、現場で整理方法が考え出されていった。抜き刷りは簡易製本。チラシ等はカードケースやクリアファイルに入れる。先述の被災度別建物分布状況図など、既製品に収まらないものは、業者に委託してエンキャプレーション処理をほどこすなど、資料に応じた整理方法がとられている。

分類はNDCから必要部分を再編成した独自分類に加え、資料形態により区分記号を併用している（例：震災-4-s1431）。この例では「s」の記号により1枚もの資料をあらわしている。1枚もの資料はそれぞれカードケースに収め、サイズごとにロッカーに別置している。

区分記号を併用した理由は、上述のように別置の際便利であることの他に、大学図書館が行っている通常の目録（NACSIS-CATや学内OPAC）の登録対象とはしていないもの、例えばパンフレット類や雑誌の抜き刷りなどを区別することにもある。

この項で紹介した資料収集や整理・分類方法については稲葉（2005）に詳述されているので、特に新しい文庫などを構築される際には参考にされたい。

4. 震災文庫デジタルアーカイブ

4.1 メタデータ

震災文庫のメタデータは、ダブリンコアのメタデータセットそのままではなく、震災文庫の特色に応じたものを設計して使用している。

その最大の特徴は、階層構造を表現できるように設計されていることである。すなわち、例えば図書の場合では、資料タイトル、章、節、写真・図表など、必要なそれぞれの部分についてデータが作成可能となっている。

これはひとつには、資料中の1部分のみが震災

資料となる場合を想定しているが、たとえ単行書1冊を収集する場合であっても、目次単位でメタデータを作成し、レファレンスと検索精度の向上に役立てている。(メタデータの設計について詳細は渡邊(2004)参照)

資料の表現は次の3種類の組み合わせで行う。

1) アーカイブ種別

これは同じメタデータフォーマットが震災文庫以外の電子化にも使われているため、それぞれの文庫を区別するためのものである。具体的には震災文庫、新聞記事文庫、住田文庫の3つがある。

なお本学の電子化資料群は他にも多数あるが、メタデータで階層構造を表現する必要がないため、この3つ以外の運営は別サーバーで行っている。

2) 資料種別

図書資料、雑誌資料、新聞・広報誌類、1枚もの資料などの種別を表現する。

3) エレメント種別

シリーズ、資料タイトル、分冊巻号、章・節、記事・論文、図表などの種別を表現する。

そしてこれら3つの組み合わせを1セットの「リソースID」として、その下にそれぞれの資料のタイトル、ページ数、大きさなど詳細項目が記される。図1の例では、4つの階層についてそれぞれメタデータの作成が行われることになる。

4.2 電子化資料

神戸大学の持つデジタルアーカイブには、主に次のようなものがある。震災関係資料、経済関係資料(新聞記事文庫、住田文庫など)、学内研究成果資料(リポジトリ、博士論文DBなど)、貴重書、その他。

電子化の方針としては、本学に独自のコンテンツを構築することを目指している。中でも旧商大コレクションとしての経済関係資料の電子化、そして被災地にある大学としての震災関係資料の電子化は、本学のユニークな事業と言えるだろう。

資料の電子化公開にあたっては著作権処理が不可欠であり、対象資料1点1点について著作権者の連絡先を調べ、郵送で許諾の問い合わせを行うといった煩雑な作業となっている。

また公開後には、閲覧者から二次使用の許諾を求められることも多く、主に写真の転載について例年数十件、撮影者に問い合わせを行っている。著作権者のクレジットを表示することを条件に、教育研究目的であれば無償で使える許諾をあらかじめ著作権者より得るようにしているが、それぞれの著作権者によりきめ細かな対応が必要となっている(なお著作権処理作業の実際については稲葉(2001)が詳しい)。

5. 震災文庫のこれから

5.1 生きた文庫を作るために

13年間にわたって収集を続けてきた震災文庫であるが、目的として掲げる「研究、防災・復興計

ツリー階層表示	
Weekly Needs = ウィークリーニーズ, vol.2 no.9-13,番外編(2/15),番外編(2/15)	
vol.2 no.9	
ここは情報のページです	
被災児童特別教育資金援助金12月1日から受付開始	
神戸市災害復興住宅特別融資(個人向け)の金利引下げ12月1	
すくすく育ってほしいね!! : 長田神社の七五三	
東京に届け!長田の涙 : 東京銀行「さっさ見てきた神戸・長田編」	
被災者の方のための災害復興公営住宅建設用地を譲ります	
「被災者向けようご借民住宅」の建設事業希望者(オーナー)を求めて	
あきちゃんかんちゃんすたあとと勉強室no.9 : こうべの復興を勉強しよう	
阪神東台南住宅バザー報告!! : 人と人とのつながり	
vol.2 no.10	
下町のきずなをつなげて : 密着商店街・金月商店	
クリスマス前後に行われる催しです	

メタデータ	
記事・論文名	被災児童特別教育資金援助金12月1日から受付開始 (ひさいじどうくすくすくようご借民住宅)の建設事業希望者(オーナー)を求めて
上位タイトル	Weekly Needs = ウィークリーニーズ, vol.2 no.9-13,番外編(2/15),番外編(2/29),vol.3 no.0-10,号外(8/4),no.11,号外(8/23),no.12,no.15,no.17-32,no.38-40,no.43-46/vol.2 no.9/ここは情報のページです
ページ数など	p[1]
出版地	神戸
出版者	すたあとと長田
出版年月	1995.11.26
大きさ	26×37cm
メタデータID	00348837
リソースID	震災/新聞等/記事・論文
本文の言語	jpn
データ登録日	20031112

(1)震災/新聞等/タイトル: Weekly Needs (2)震災/新聞等/巻号: vol.2 no.9 (3)震災/新聞等/ブロック: ここは情報のページです (4)震災/新聞等/記事・論文: 被災児童特別教育資金援助金12月1日から受付開始

図1 メタデータの例: 階層毎のリソースIDとその内容記述

画」への寄与のためには、資料を収集するだけでは不十分であり、生きた文庫であり続けるためには、活用の試みを持続することが不可欠である。

資料収集のために開始当初から数々の学内経費を申請・取得していたが、外部資金として平成10年には科研費を申請、多額の配分を受けて、電子版震災文庫ともいえる「阪神・淡路大震災マルチメディア・アーカイブズ」の構築を開始した。この5ヶ年計画は既に配分を終了しているが、データベース構築と資料の電子化・公開は現在も進行中である。電子化により利用時間および空間の制約がなくなり、また多様な検索が可能となることで、新たな資料の活用方法が生まれることが期待される。

5.2 他機関との連携

貴重な資料の有効活用を図る方法として、他機関との連携も考えられる。「人と防災未来センター」をはじめとした地域の震災資料収集機関と、データベースを横断検索する計画がある。

また構想段階ではあるが、本学と海外大学による「都市災害の軽減に関する共同研究」プロジェクトには、震災文庫のメタデータを国際的に利用するための共同事業計画が盛り込まれている。

震災から月日が経過するにつれ、直接関連した資料は少なくなってきたはいるが、阪神・淡路大震災以降も世界各地で起こっている都市災害の復興支援や、また防災研究・教育に対して、震災文庫が果たすべき役割は今後も決して小さくはないだろう。

(なかやま たかひろ)

<参考>

稲葉洋子 (2001) 神戸大学「震災文庫」の電子化と著作権『2000年京都電子図書館国際会議：研究と実際』p.141-145 京都大学電子図書館国際会議編集委員会編

稲葉洋子 (2005)『阪神・淡路大震災と図書館活動：神戸大学「震災文庫」の挑戦』人と情報を結ぶWEプロデュース

佐々木和子 (2006) アーカイブズが生まれる『アーカイブズ学研究』No.4 p.20-37

渡邊隆弘 (2004) 震災デジタルアーカイブにおけるメタデータの管理と検索：資料中の構成要素の取扱いを中心に『図書館界』56(1) p. 14-29

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/90000337.pdf>
震災文庫ホームページ

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/>

震災文庫収集資料点数 (2008年9月1日現在)

	全点数(タイトル数)	電子化点数(タイトル数)
図 書	6,337 (5,597)	429 (410)
雑 誌	12,223 (3,018)	29 (12)
新聞・広報誌	13,074 (2,491)	215 (35)
パンフレット	5,364 (5,316)	938 (938)
一 枚 も の	5,876 (5,876)	3,053 (3,053)
写 真	87 (85)	21 (21)
地 図	132 (126)	4 (4)
動 画	252 (209)	11 (11)
音 声	84 (69)	2 (1)
コンピュータ資料	81 (80)	2 (2)
www	7 (1)	7 (1)
総 合 計	43,517 (22,868)	4,711 (4,488)

Kobe University Library Great Hanshin-Awaji Earthquake Disaster Materials Collection and the Digital Archive : Its feature and the future issues

(By NAKAYAMA Takahiro, Digital Library Section, Kobe University Library)

Kobe University Library has a collection of materials relating to the Great Hanshin-Awaji Earthquake occurred in 1995. This is a result of a unique action by librarians themselves who tried to collect documents to record the disaster to future. It was an action to build a library as its origin of the word. This article describes its feature and the future issues of the collection.